

2006年12月22日

人間科学研究科長 殿

笹川 智子氏 博士学位申請論文審査報告書

笹川 智子氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査をしてきましたが、2006年12月22日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1. 申請者氏名 笹川 智子

2. 論文題名 子どもの社会不安に対する早期介入・予防プログラムの開発

3. 本文

本研究は、子どもの社会不安に対する早期介入・予防プログラムの開発とその効果を検討したものである。まず、本論文の概要を紹介し、次にその評価について審査結果を報告する。

近年、成人の社会不安障害の実態調査や治療的介入が注目を集めているが、同時に児童青年期の社会不安に対する関心も高まりつつある。子どもは発達過程において一時的に対人関係や他者からの否定的な評価に対して敏感になることが知られているが、そうした不安が過度に高まり、適応的な行動が阻害されるとき、さまざまな適応上の問題が引き起こされる。若年期発症の社会不安は予後が悪く、学業上・対人関係上の困難などの社会的機能障害をもたらしやすい。このような機能障害が起こる前に適切な介入を行うことができれば、社会不安障害の一次予防に大きく貢献できることが期待される。

欧米では、すでに早期介入プログラムが検討されているが、本邦においては児童青年期の社会不安に関する知見が十分に蓄積されておらず、介入技法の研究もほとんどなされていない。特に学校等の教育機関では児童の「対人不安」が不登校などの問題行動に結びつくケースが多く、対処困難な課題となっている。効果的な介入技法が確立されれば学校が有力な支援提供の場となることが期待できるが、現状では社会不安に対する体系的な介入プログラムが存在せず、教員も問題の対応に苦慮していることが指摘されている。そこで、本研究では児童期の社会不安の特徴を調査し、早期介入・予防のための認知行動プログラムを開発することを目的とした。同時に、作成したプログラムの学校環境における適用・維持可能性について検討したものである。

まず、首都圏の公立学校に通う小学5年生 592 名および中学2年生 467 名を対象に、日本語版 Social Phobia and Anxiety Inventory for Children (SPAI-C) と、社会的場面に関するシナリオ提示課題による社会不安の測定を実施した。SPAI-C は、児童青年期の社会不安を測定するために最も広く用いられている自己記入式質問紙であり、シナリオ提示課題は、社会不安場面についてのシナリオに対し、その場面で浮かぶ考えと対処を尋ねるものである。その結果、項目反応カテゴリ特性曲線 (IRCCC) より中学生では小学生よりも不安の生じる場面とそうでない場面の弁別が明確であり、全体的に社会不安得点が高いことが示された。このことから、介入プログラムでは小学生よりも中学生を対象とした方が高い効果が得られることが示唆された。また、社会不安の高い子どもにおいては心拍の亢進、ネガティブな考え、社会的な場面における対処スキルの欠如が顕著に見られた。これらの結果から、リラクゼーション法、認知的再体制化、社会的スキル訓練を組み合わせた認知行動介入プログラムを作成した。

次に、首都圏の公立 A 中学校の1年生1学級 30 名、2年生1学級 33 名を対象に、計3回 (1回 45-50 分) の社会不安に対する早期介入・予防プログラムを実施した。プログラムは、①リラクゼーション法、②社会的スキル訓練、③認知的再体制化の3技法を中心に構成し、臨床心理学を専攻する大学院生4名によって実施した。プログラム実施後の社会不安得点は全体として有意に減少し、ネガティブな認知にも改善が見られた。日本語版 SPAI-C によって測定されたプログラム実施前の社会不安得点が平均値の1標準偏差以上であった高不安者において、特に顕著な効果が得られた。長期フォローアップ研究として、プログラム介入群とほぼ同数の統制群について、プログラム実施後3ヶ月、6ヶ月、1年後の時点で比較した結果、高不安者の1年後の社会不安得点において介入群で有意な改善が認められた。このことから、本研究で開発したプログラムは、社会不安の低減・予防に対して有効であることが示された。

また、プログラムの導入・維持にかかわる要因を検討するため、首都圏近郊の公立中学校に勤務する教員 15 名を対象に質問紙調査を行った。対象者には社会不安に関する説明文を呈示し、そうした問題を持つ子どもとの接触機会の有無、対処の困難度と対処方法、早期介入・予防プログラムに対する興味、プログラムを実施する上での障害など、8つの質問項目に対する回答を求めた。その結果、8割の教員が社会不安の高い児童生徒と日常的に接しており、効果的なプログラムが提供されれば使用してみたいと考えていることが示された。また、プログラムを実施する上での最大の障害は授業時間を確保できないことであったが、本研究で開発した3回の介入プログラムは学校環境の中で適用・維持可能なものであることが示唆された。

本研究は子どもの社会不安に対する包括的な学級ベースでの介入プログラムを開発し効果検討をしたものである。本研究の成果としては、①小学校、中学校生徒を対象に実態調査を行い、児童期における社会不安の特徴を検討したこと、②その結果に基づいて早期介入プログラムを作成し効果検討をしたこと、

③短期効果だけではなく統制群をおいたフォローアップ調査による長期効果検討をしたこと、④介入プログラム導入に当たっての学級ベースでの実現可能性についての教員対象の調査を行ったことが挙げられる。本研究の意義としては、有病率が10～20%と高頻度である社会不安障害の予防的効果を持つ早期介入プログラムの開発であり、学級ベースで導入されれば社会不安障害の低減に寄与するものと期待されることである。

学校現場でさまざまな制約がある中で統制群をおいた効果検討というエビデンスを提供した本研究の成果は特筆すべきもので、社会不安障害の予防という領域において嚆矢となる研究である。今後、さらに対象を拡大しその効果を確立することによって、学校における学級ベースでのプログラムとして広く導入されることが望まれる。また、社会不安の低減だけでなく、社会的スキルを向上することによって社会適応能力を促進する上でも有用であり、学校教育の一環としての機能も期待される。

以上の結果より、本審査委員会は、笹川智子氏の学位申請論文「子どもの社会不安に対する早期介入・予防プログラムの開発」は博士(人間科学)に値する研究であるとの結論に至った。

4. 笹川 智子氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査員	早稲田大学	教授	博士(医学)(東京大学)	野村 忍 印
審査員	早稲田大学	教授	博士(人間科学)(早稲田大学)	根建 金男
審査員	早稲田大学	教授	博士(人間科学)(大阪大学)	根ヶ山光一
審査員	早稲田大学	助教授	博士(人間科学)(早稲田大学)	嶋田 洋徳